

J.LEAGUE™ NEWS

2012 Jリーグ
ヤマザキナビスコカップ

FINAL 20th Anniversary



© J.LEAGUE PHOTOS

鹿島アントラーズが2連覇を飾る

延長戦の末、清水エスパルスに競り勝つ。大会最多記録を更新する5回目の優勝

2012 Jリーグヤマザキナビスコカップ決勝が11月3日に国立競技場を舞台に開催され、鹿島アントラーズが延長戦を含む120分の激闘の末に清水エスパルスを2-1と下し2連覇、大会最多記録を更新する5回目の優勝を飾った。鹿島には賞金1億円、Jリーグカップ(チェアマン杯)、ヤマザキナビスコカップ(スポンサー杯)、メダルが、準優勝の清水には賞金5千万円、Jリーグ杯、メダルが、それぞれ授与された。準決勝で敗れた3位のFC東京、柏レイソルには、ともに賞金2千万円、杯が授与された。決勝のMVP賞は鹿島のMF柴崎 岳、ニューヒーロー賞は清水のMF石毛秀樹が受賞した。(2~3ページに関連記事)

J.LEAGUE™ TOP PARTNERS

Calbee Canon KONAMI AiDEM Coca-Cola McDonald's JCB

J.LEAGUE™ 100 YEAR VISION PARTNER

朝日新聞

J.LEAGUE™ FAIRPLAY PARTNER

東京エレクトロン

LEAGUE CUP SPONSOR

ヤマザキナビスコ

SUPER CUP SPONSOR

FUJI XEROX

J.LEAGUE™ OFFICIAL EQUIPMENT PARTNER

adidas

J.LEAGUE™ OFFICIAL SUPPLIER

Johnson & Johnson

J.LEAGUE™ OFFICIAL BROADCASTING PARTNER

スカパー!

SPORTS PROMOTION PARTNER

0000

J.LEAGUE™ OFFICIAL TICKETING PARTNER

ぴあ

2012 Jリーグ
ヤマザキナビスコカップ
FINAL
20th Anniversary



柴崎が鹿島の全得点をマーク。 MVP賞に輝く

決勝のMVP賞に輝いた鹿島の柴崎(左)と、ニューヒーロー賞を受賞した清水の石毛の競り合い

決勝の晴れ舞台に立ったのは、先発メンバーの平均年齢が23歳と若さあふれる清水エスパルスと、先発11人のうち7人が昨年の決勝を戦っている経験豊富な鹿島アントラーズ。清水の攻勢に鹿島が粘り強く対応する時間が続き、後半に両チームがPKで得点して1-1のまま、昨年の決勝と同様、延長戦に突入した。

鹿島の決勝点が生まれたのは、延長戦開始

から間もない93分。DF西 大伍のパスを巧みにコントロールして抜け出したMF柴崎 岳が右足を振り抜くと、ボールはゴール左隅に突き刺さった。再びリードした鹿島はその後、清水の反撃をしのぎつつ、素早いカウンターアタックで相手ゴールへ迫るなど、熟練した試合運びで2-1のスコアをキープして逃げ切った。

20回目の開催となったJリーグヤマザキナビスコカップの歴史で、鹿島の優勝は1997、

2000、02、11年に続き5回目となり、最多記録を更新した。決勝のMVP賞は、PKで先制点も決めるなど、チームの全得点をマークした柴崎が受賞。20歳のヒーローは「2得点は出来過ぎ」と謙虚に語り、「個人賞にはあまり縁がなかったので、MVPについては素直にうれしい」と喜びを表した。また、1997年の決勝でMVP賞を手に行っているジョルジーニョ監督は、選手、監督の双方でタイトル獲得という大会史上初の快挙を成し遂げた。

敗れたとはいえ、清水のはつらつとした攻撃的サッカーは、ファン・サポーターを魅了した。FWの大前元紀、高木俊幸らが素晴らしい技術を発揮して攻め込み、後半アディショナルタイム1分に出場したMF石毛秀樹も、ニューヒーロー賞にふさわしい才能の片りんを見せた。「1点の重みが違う。(鹿島との)経験の差を感じた」と石毛。若い選手たちがこうした感想を持つことができたのも、大きな収穫だろう。



©J.LEAGUE PHOTOS

清水はリードを許した4分後、大前がPKを決めて追い付く

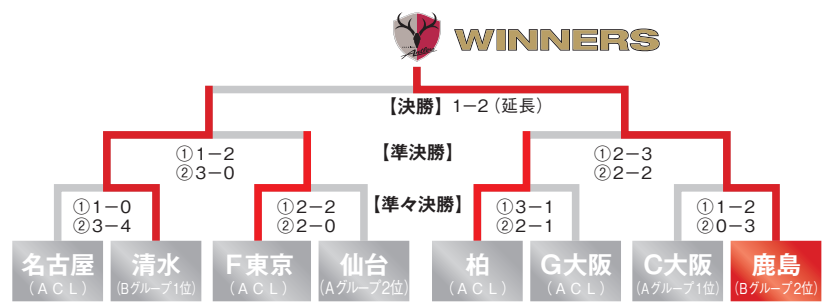


©J.LEAGUE PHOTOS

昨年のMVP賞を獲得した鹿島の大迫(左)。右は清水の村松

2012 Jリーグヤマザキナビスコカップ 決勝トーナメント

※表の左側のチームをホームチーム扱いとする。(表の右側のチーム：第1戦ホームチーム/左側のチーム：第2戦ホームチーム)



©J.LEAGUE PHOTOS

小笠原(右)にカップを授与したヤマザキナビスコ株式会社の飯島社長



2012年11月3日 13:10キックオフ 国立競技場



清水エスパルス 1 2 鹿島アントラーズ (延長)



【入場者数】4万5228人
【主審】家本 政明
【副審】宮島 一代 / 村上 孝治
【第4の審判員】廣瀬 格

【得点経過】
73分 0-1 (鹿)柴崎 岳 (PK)
77分 1-1 (清)大前 元紀 (PK)
93分 1-2 (鹿)柴崎 岳



決勝前のピッチでは恒例の「ナビスコキッズバトル」



ゲーム参加者にはヤマザキナビスコのお菓子をプレゼント



フェイスペインティングシールを来場者に無料でサービス



ビクトリーロードの写真パネルの前に記念撮影



東日本大震災の復興支援の一環として募金活動を実施



10月22日~11月3日に山手線で20周年記念の車体広告を展開

ジョルジーニョ監督 (鹿島)

「まず選手たちに『優勝おめでとう』と伝えたい。同時に、どんな状況でも支えてくれるサポーターに感謝を伝えたいと思う。きょうは、選手たちが諦めずに努力した成果を示せたと思う。試合に関しては、清水は面白い形の選手の配置をして、パスワークで崩してきた。勢いとスピードを持って攻撃を仕掛け、けん制をしなくてはならない部分もあった。その困難な状況を選手たち自身が情報を整理して、相手の長所を消す作業をした中でチャンスをつくりだすことができた」



© J.LEAGUE PHOTOS

アフシン ゴトビ監督 (清水)

「初めに、いつもわれわれの後ろで声援を送ってくれるサポーターに感謝したい。そしてきょう、彼らにトロフィーを渡せずに申し訳なく思う。いいパフォーマンスを出すために、選手・スタッフ全員でいい準備をしていたと思う、試合の多くはわれわれがコントロールできていたが、ゴールを決め切れなかった。とはいえ、チーム・選手を誇りに思っている。今回の(決勝までの)道のりが清水エスパルスというチームをもっと強くと思う」



© J.LEAGUE PHOTOS

大東和美 Jリーグチェアマン

「晴天に恵まれ、国立競技場を埋め尽くした満員の観客の中、記念すべき20回大会にふさわしい素晴らしい試合内容であった。どちらのクラブも若手選手の躍動感あふれる活躍が光り、非常に見応えがあった。延長の末、鹿島が辛くも勝利を挙げたが、どちらが勝利してもおかしくなかった。鹿島は20歳の柴崎選手が2得点し、決勝のMVP賞を獲得したが、彼はヤマザキナビスコカップが開幕した1992年生まれ。さらに背番号は20番。20回目の大会を象徴するような結果になったことを、心からうれしく思う」



© J.LEAGUE PHOTOS

決勝前夜祭&ニューヒーロー賞

決勝前日の11月2日には、両チームの監督、選手らも出席して、都内のホテルで決勝前夜祭が開催された。Jリーグの大東和美チェアマンは冒頭、「両チームが最高のパフォーマンスを発揮して、ファイナルにふさわしい熱戦になることを期待する」とあいさつ。「これだけの長きにわたる歴史をとらえ、つくり上げてきたヤマザキナビスコ株式会社との飯島(茂彰 代表取締役)社長をはじめ、多くの関係者の皆さまに感謝とお礼を申し上げる」と述べた。

また、飯島社長は「優勝チームはカップを持ち帰り、地域の振興に役立てていただきたい。準優勝チームも決勝進出を誇りに思い、地域の活性に役立てていただければ、(大会の)スポンサーとしてこれ以上の喜びはない」とスピーチした。飯島社長には20回の開催を記念したシャーレが、大東チェアマンより贈られた。

1回戦から準決勝まで、最も活躍が顕著だった23歳以下(大会開幕時)の選手が対象となるニューヒーロー賞は、清水のMF石毛秀樹が受賞した。18歳1カ月での受賞は、同賞史上最年少。賞金50万円、クリスタルオーナメント、ヤマザキナビスコ製品

1年分を贈呈された石毛は「周囲の皆さんに感謝したい。今、自分が一番(受賞を)驚いている」と感想を述べた。



ニューヒーロー賞を受賞した石毛



© J.LEAGUE PHOTOS

大東チェアマンより飯島社長に大会20周年を記念するシャーレが贈呈された

甲府が初優勝、湘南が2位でともにJ1昇格



© J.LEAGUE PHOTOS



© J.LEAGUE PHOTOS

リニューアルしてサイズが大きくなったJリーグ杯（優勝銀皿）

福岡戦を3-2で競り勝ち、勝点を81へ伸ばした。この時点で4試合を残す2位の京都との勝点差が14となったため、甲府の初優勝が決まった。今シーズンから指揮を執り、1年でJ1復帰に導いた

城福 浩監督は「選手、スタッフ、サポーターが一丸となって勝ち取った優勝。彼らを誇りに思う」と胸を張った。チームはその後も安定した戦いを続け、最終的にはJ2記録を更新する24試合連続無敗でシーズンを締めくくった。

2位争いは最終節に持ち込まれ、京都、湘南、大分、横浜FCの4チームに可能性があった。勝てば2位が確定する京都は、甲府と0-0の引き分けで勝点を74としたものの、町田に3-0の快勝を収めた湘南が同75として逆転し、3シーズンぶりのJ1復帰。敗れた町田は22位となり、Jリーグ準加盟クラブでJ2クラブライセンスを保有するV・ファーレン長崎が、JFLで優勝したため、J2・JFL入れ替え戦はなくなり自動降格となった。

第26節からの首位を守り抜いて優勝を飾った甲府。連続無敗記録も更新した

J2リーグ戦は11月11日に終了。優勝を飾ったヴァンフォーレ甲府、2位の湘南ベルマーレがJ1リーグへの自動昇格を決め、3~6位の京都サンガF.C.、横浜FC、ジェフユナイテッド千葉、大分トリニータが2012 J1昇格プレーオフに出場した。また、22位のFC町田

ゼルビアは来シーズン、JFLでプレーすることになった。

第38節でJ1への昇格条件の一つとなる2位以内を確定した甲府（前号既報）が、優勝を決めたのは10月21日の翌第39節。アウェイのレベルファイブスタジアムで行われたアビスパ

順位表

順位	チーム	勝点	試合	勝	引分	敗	得点	失点	得失差
1	ヴァンフォーレ甲府	86	42	24	14	4	63	35	+28
2	湘南ベルマーレ	75	42	20	15	7	66	43	+23
3	京都サンガF.C.	74	42	23	5	14	61	45	+16
4	横浜FC	73	42	22	7	13	62	45	+17
5	ジェフユナイテッド千葉	72	42	21	9	12	61	33	+28
6	大分トリニータ	71	42	21	8	13	59	40	+19
7	東京ヴェルディ	66	42	20	6	16	65	46	+19
8	ファジアーノ岡山	65	42	17	14	11	41	34	+7
9	ギラヴァンツ北九州	64	42	19	7	16	53	47	+6
10	モンテディオ山形	61	42	16	13	13	51	49	+2
11	栃木SC	60	42	17	9	16	50	49	+1
12	松本山雅FC	59	42	15	14	13	46	43	+3
13	水戸ホーリーホック	56	42	15	11	16	47	49	-2
14	ロアッソ熊本	55	42	15	10	17	40	48	-8
15	徳島ヴォルティス	51	42	13	12	17	45	49	-4
16	愛媛FC	50	42	12	14	16	47	46	+1
17	ザスパ草津	47	42	12	11	19	31	45	-14
18	アビスパ福岡	41	42	9	14	19	53	68	-15
19	カターレ富山	38	42	9	11	22	38	59	-21
20	ガイナレ鳥取	38	42	11	5	26	33	78	-45
21	FC岐阜	35	42	7	14	21	27	55	-28
22	FC町田ゼルビア	32	42	7	11	24	34	67	-33

甲府の優勝についての 大東和美 Jリーグチェアマン コメント

激戦が続いたJ2の中でも、シーズンを通して安定的に勝点を積み重ねた戦いぶりを見張るものだった。特に、J2記録を更新したリーグ戦20試合連続無敗での昇格決定は特筆すべきものだった。この躍進は、山梨中銀スタジアムに詰め掛けた数多くのファン・サポーターからの熱い声援が、選手たちを力強く後押しした結果であると確信している。来シーズンは再びJ1の舞台での戦いとなるが、さらなるレベルアップを図り、ファン・サポーターとともにリーグを活性化させる役割を担ってくれることを期待している。

得点ランキング上位

順位	選手	所属	得点数	順位	選手	所属	得点数
1	ダヴィ	甲府	32	5	武富 孝介	熊本	14
2	阿部 拓馬	東京V	18	5	三平 和司	大分	14
2	川又 堅基	岡山	18	5	森島 康仁	大分	14
4	藤田 祥史	千葉	15	11	大久保 哲哉	横浜FC	12
5	中村 充孝	京都	14	11	船山 貴之	松本	12
5	有田 光希	愛媛	14	11	城後 寿	福岡	12
5	端戸 仁	北九州	14				



© J.LEAGUE PHOTOS

湘南は最終節で2位に浮上し、J1昇格を決めた

2012 JLEAGUE ROAD TO J1 PLAY-OFFS SEMI-FINALS

千葉、大分が決勝で対決

J2リーグ戦の3~6位による2012 J1昇格プレーオフ準決勝の2試合が11月18日に行われ、ジェフユナイテッド千葉と大分トリニータが同23日に国立競技場で開催の決勝へ勝ち進んだ。

ニッパツ三ツ沢球技場では5位の千葉が4位の横浜FCに、京都市西京極総合運動公園陸上競技場兼球技場では6位の大分が3位の京都サンガF.C.に、それぞれ4-0と勝利した。千葉はFW藤田祥史の先制点を含む2得点

などで、決勝へ駒を進めた。また、大分は、FW森島康仁がチームの全4得点をマークする大活躍を見せた。

J1昇格プレーオフは今シーズンから導入された。準決勝、決勝とも1試合制で、90分の戦いを終えて引き分けの場合は、年間順位の優位性を確保するため、年間順位が上位のクラブを勝者とする。



© J.LEAGUE PHOTOS

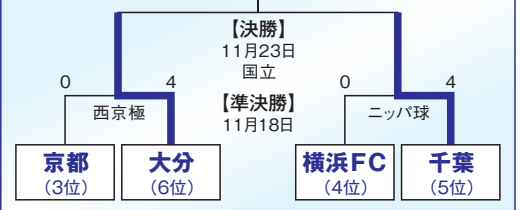
千葉の先制点を蹴り込む藤田。後半にも追加点を挙げた



© J.LEAGUE PHOTOS

チーム、そして自身の4得点を決める大分の森島

【2012 J1昇格プレーオフ組み合わせ】



※表の左側のチームをホームチーム（決勝の場合はホームチーム扱い）とする

V・ファーレン長崎のJリーグ入会を承認

Jリーグは11月12日に行われた臨時理事会において、2013シーズンからのJ2リーグ入会を申請していたJリーグ準加盟クラブのV・ファーレン長崎について、J2入会を承認した。

Jリーグの大東和美チェアマンは、臨時理事会後の記者会見で「入会を満場一致で承認した。入会に向けて準備に取り組んできたクラブ、そして全力で支援した皆さまに敬意を表したい」と語った。また、来シーズンの開幕前に長崎県諫早市にホームスタジアムが完成することに触れ、「ぜひ新しいスタジアムが多くの観客でにぎわい、新しいスポーツ文化が根付くことを期待する」と述べた。



臨時理事会の結果を電話で長崎に伝える大東チェアマン

Jリーグ TEAM AS ONEプロジェクト all dream チャリティーイベント開催

Jリーグは11月20日の理事会で、「Jリーグ TEAM AS ONE プロジェクト all dream チャリティーイベント」を開催することを決定した。

Jリーグでは「チカラをひとつに。- TEAM AS ONE -」をスローガンとして、さまざまな復興支援活動を実施してきた。その中で「Jリーグ TEAM AS ONE 募金」の使途として、宮城県・岩手県の被災地沿岸部を中心にグラウンド用簡易照明の寄贈を行ってきたが、被災地の中でも放射線の影響が強く、屋外での活動が制限され、募金の支援が行き届いていない福島県への復興支援を目的に開催する。

開催日	2012年12月1日(土)~2日(日)
内容	福島県の中学生約100人を招待してのJリーグ観戦およびサッカークリニック
会場	①12月1日 味の素スタジアム(FC東京vsベガルタ仙台 観戦) ②12月2日 フクダ電子アリーナ(サッカークリニック)
主催	公益社団法人 日本プロサッカーリーグ
協力	一般社団法人 日本プロサッカー選手会、一般社団法人 Jリーグ選手OB会、アディダス ジャパン株式会社、キャンマーケティングジャパン株式会社、日本コカ・コーラ株式会社

活発化するアジアとの交流。岡山、福岡が東南アジア遠征

J2のファジアーノ岡山、アビスパ福岡が、それぞれミャンマー、ベトナムに遠征して試合を行った。海外遠征が初めてとなる岡山は、ヤン

ゴンでミャンマー代表と2試合を行い、ともに1-1で引き分けた。東南アジアへの遠征は初となる福岡は、ベトナムのビンズオン省トゥー

ザウモットで開催された「BTV CUP 2012」に参加。予選リーグはSHBダナン(ベトナム、2012 Vリーグ優勝)に1-0、グレミオ・バルエリ(ブラジル)に0-2、サイゴン・シュアンタン(ベトナム、2012 Vリーグ3位)に2-2と、1勝1分1敗で3位となり、準決勝進出は成らなかった。

Jリーグはことし、アジア戦略の一環として東南アジア3カ国(タイ、ベトナム、ミャンマー)の各プロリーグとパートナーシップ協定を締結。相互のフットボール発展に向け、さまざまな分野で協力関係を構築している。岡山、福岡の遠征についても、日本サッカー協会を通じてJリーグに招待が届き実現した。(8ページに関連記事)



第1戦の岡山。ほぼベストメンバーで、追いついての引き分け



第2戦でキャプテンの城後を先頭に入場する福岡の選手たち



2012 J YOUTH CUP 2012 ジュースカップ 第20回 Jリーグユース選手権大会

決勝トーナメントがスタート

10月20日に開幕した「2012 ジュースカップ 第20回 Jリーグユース選手権大会」は、11月11日に予選リーグが終了した。同日には日本クラブユースサッカー連盟代表4チームも決定。計24チームによる決勝トーナメントが11月17日にスタートした。



予選リーグの鳥取 vs 北九州

2012ジュースカップ 第20回Jリーグユース選手権大会											
主催	公益財団法人 日本サッカー協会 / 公益社団法人 日本プロサッカーリーグ / 朝日新聞社 / 日刊スポーツ新聞社										
共催	一般財団法人 日本クラブユースサッカー連盟					協賛 株式会社日本旅行					
決勝トーナメント											
1回戦	2回戦	準々決勝	準決勝	準決勝	準決勝	2回戦	1回戦	※JCY:日本クラブユースサッカー連盟			
11/17(土)	11/23(金祝)	11/25(日)	12/22(土)	12/22(土)	11/25(日)	11/23(金祝)	11/17(土)				
ヴィッセル神戸U-18	いぶき 14:00					清水エスパルスユース					
大分トリニータU-18	1					アウスタ 13:00	3				柏レイソルU-18
ジュビロ磐田U-18	4					0					大宮アルディージャユース
サンフレッチェ広島F.Cユース						万博 11:00					ガンバ大阪ユース
浦和レッズユース	吉田 13:00					7					川崎フロンターレU-18
横浜武蔵野フットボールクラブユース(JCY)	2					0					愛知フットボールクラブU-18(JCY)
コンサドーレ札幌U-18											鹿島アントラーズユース
愛媛FCユース	刈谷 14:00										鹿島G 13:00
アルビレックス新潟ユース	1					5					横浜F・マリノスユース
セレッソ大阪U-18	2					2					京都サンガF.C.U-18
アビスパ福岡U-18											横浜FCユース
エストレラ総務フットボールクラブU-18(JCY)	舞洲 14:00										YLTC 14:00
	1										1 (PK 6S)
	0										1

Jクラブと歩む「地域」「ひと」

37

名古屋グランパス



行政や若者のアイデアを取り込み、 魅力が詰まったクラブ経営を考える



9月1日の柏戦前にスタジアム外の広場で行われたBMXのパフォーマンス

©名古屋役所

学生グループの取り組み

日本の三大都市の一つであり、買い物も娯楽も不自由ないけれど、何かに熱くなることが少ない。そんな名古屋の若者の有り余る活力を生かせないか。名古屋グランパスがホームタウン活動の有力なターゲットとしているのは、政令市で全国2位の12万6千人を誇る学生たちだ。今シーズンからクラブ経営に若者ならではのアイデアや行動力を取り込んでいる。

9月1日のJ1リーグ戦第24節、柏レイソル戦。名古屋市瑞穂陸上競技場は、普段と一風変わった雰囲気になってきた。フェイスパイントの出演、グランパスのグッズを身にまとったファッションショー、BMXや地元大学太鼓部のパフォーマンス。随所に人だかりができた。

「学祭天国」と名付けられたこの日の一連のイベントを企画、運営したのは約20人の学生グループ。2カ月前から週2〜3回、グループ内やグランパス関係者と会合を重ね、「若者目線」のスタジアムづくりを目指した。ツイッターやフェイスブックなど、若者の中心となっている連絡手段を用い、情報を拡散。当日はボランティアや出演者、合わせて120人が運営に携わった。

グランパスは進行や交渉など運営のノウハウ

を学生に提供し、車で資料運搬など学生ができない作業も手伝った。学生リーダーで名古屋市立大1年の成田明穂さんは「グランパスの方々が、最大限、私たちの意見に耳を傾けてくれた。メールの



成田明穂さん

送り方や作法など細かなところまで親切に指導をしてもらい、『社会』を学ぶことができた。当日『なんかきょうは雰囲気が違うな』という来場者の声を聞いた時はとてもうれしかった」と振り返る。試合後にはストイコビッチ監督と記念撮影。「メンバーの多くは、グランパスは知っていても観戦したことはなかった。でも今はクラブが身近になり、監督と撮った写真を携帯電話の待ち受け画面にしている人もいる」と成田さんは笑う。

一方、グランパスの依頼で、若者の観戦行動を研究している学生グループもいる。名古屋市立大の河合篤男ゼミに属する5人だ。学内、豊田スタジアム、名古屋市瑞穂陸上競技場でアンケートを実施。観戦の魅力やサポーターの傾向を分析している。リーダーで同大3年の曾我拓馬さんは「多くの人が学生生活で重視しているのは、友人付き合い。飲み会やカラオケなど集団で騒げる場を求めている」と、調査から浮き彫りになった実態を明かす。一方で、200人を対象に実施した学内調査では、大学入学後、サッカー観戦の経験があったのはわずか8%。「スタジアムはみんなでわいわいできて、ニーズに応えられる場なのに学生との距離は遠い」と、課題を口にする。研究結果は年内にも発表し、グランパスに提出する。



曾我拓馬さん

クラブ、行政、学生の思惑が一致

二つの学生グループとグランパスを引き合

せたのは、ことし4月に名古屋市が開校させた仮想キャンパス「ナゴ校」だ。学生の地域交流やアイデア実現を市が支援する取り組みで、まちの魅力や活力向上を狙いとす。愛知県内の大学、短大など31校から215人の学生が参加(2012年10月末現在)。市中心部・栄の名古屋テレビ塔を拠点に「交流」「イベント」「情報発信」「クリエイティブ」の4部門でチームをつくり、行政や民間企業、地域と連携した事業を展開している。

「ナゴ校」の事務局となる、市総合調整室の松雄俊憲部長は「名古屋は都会だから、これまで市もグランパスも

若者を巻き込む活動をしてこなかった。だが、近年は東京、大阪間の移動時間が短くなり、人材が他府県の大学や企業にどんどん流出している」と危機感を募らす。



松雄俊憲氏

開校に合わせ、入場者数の減少やサポーターの高齢化に悩むグランパス、グランパスの高い知名度を生かしたい行政、自己実現の場を探している学生、三者の思惑が一致し、このような取り組みが実現した。

活動を通じ、クラブや地元への愛着が深まれば、グランパスと名古屋市が抱える課題の解消につながる。「グランパスは今や公共物に近い存在。市や学生みんなで知恵を出し合い、オール名古屋で盛り上げたい」と松雄部長。今シーズン、20周年を迎えたグランパスは観戦、応援、運営、学び、交流など、さまざまな魅力の詰まったクラブ経営を市や若者と考えている。

(中日新聞 原田 遼)



名古屋市瑞穂陸上競技場のスタンドでアンケート調査を行う名古屋市立大の学生(6月23日のJ1第15節、ジュビロ磐田戦)

「豊かで充実したスポーツ環境を実現し、地域に根差したスポーツクラブを中心に、日本にスポーツ文化を育む」ことを目指す「Jリーグ百年構想」のもと、Jクラブはそれぞれのホームタウンを中心に、さまざまな取り組みを行っている。そして、Jクラブの存在、活動は、地域とそこに暮らす人々に影響、刺激を与え、新たなムーブメントを生んでいる。Jクラブと手を携えながら、ともに歩む人々や、その活動を紹介するこのシリーズ。今号では名古屋グランパス、松本山雅FCと連携した地域の取り組みにスポットを当てた。



38

松本山雅FC



一緒にクラブをつくり上げてきた仲間。 スポーツの持つ大きな力で地域を元気に

プロ意識を持ちながら活動

「こんにちは」

「いらっしゃいませ」

大分トリニータを松本平広域公園総合球技場に迎えた11月11日のJ2リーグ戦最終節。1万2956人が訪れたスタジアムには、松本山雅FCのホームゲーム運営をサポートするボランティア組織「チームバモス」のメンバーの明るい声が響いた。

メンバーが担う役割は、入場口でのチケット確認やマッチデープログラム配布、場内誘導、グッズ販売など。サッカーファンやサポーターを優しい笑顔で迎え入れる姿がスタジアムの雰囲気をもたせている。チームバモス代表の田中恵介さんは「松本山雅のために何かをしたいという人たちの集まり。プロではないが、お客さまと一緒にいいスタジアムをつくりたいというプロ意識を持ちながら活動しています」と説明する。

田中代表も、もともとは松本山雅FCを応援するサポーターの一人だった。北信越リーグ当時は試合運営スタッフが少なかったため、別の形でチームを支えたいという思いから2004年にチームバモスを結成した。

結成当初は30人だけだったが、ホームペー



田中恵介氏

ジで募集を呼び掛けたり、ボランティア体験会を開いたりしながら仲間を増やしていき、メンバー数は11月最終節時点で196人。高校生から70代まで幅広い年齢層が集まり、地元松本市はもちろん、試合のために静岡、横浜、仙台、大阪から駆け付けるメンバーもいる。

ことしからバモスに仲間入りした長野県塩尻市の西沢幸子さん(70)は、スタジアム入場口でチケット確認の業務を担当。同年代のサポーターがねぎらいの言葉を掛けてくれることがうれしいと言い、「孫のような年齢の人たちから元気をいただいている。元気なうちは活動を続けていきたい」と笑顔で話してくれた。

駐車場誘導や場内警備など、警備会社に委託している業務もあるものの、訪れた観客と接する機会が多い業務はできるだけバモスのメンバーが請け負う。田中代表は「お客さまに何が必要なのかを理解し、生きた運営ができることが最大のメリット。笑顔一つにしても、心から出るいい笑顔で活動できる」と、松本山雅FCを愛する人たちだからこそ親身な接客ができると強調する。プロの講師を招いた接遇講習会や救急救命講習会を開催するなど、ホスピタリティーのレベル向上や快適なスタジアムづくりを目指している。

他のスポーツの運営もサポート

クラブスタッフが少なかった時期は、試合運

営の全てをバモスに頼んでいたといい、株式会社松本山雅の大月弘士代表取締役社長は「バモスは単なるボランティアというより、一緒にクラブをつくり上げてきた仲間。今後さらにいい関係を築き上げていきたい」。バモスの活動がクラブの成長を支え、JFL1年目の2010年は5,079人だったホームゲームの平均入場者数は、11年は7,461人、J2参入1年目の今シーズンは9,531人と順調に伸びている。

週末開催と平日開催の試合で参加数に変動はあるものの、1試合平均約90人のメンバーが活動に参加している。それでも田中代表は「試合運営だけを考えればぎりぎり足りているが、十分なおもてなしをするためにも、さらに仲間を増やしたい」と考えている。「新たな形で松本山雅と関わり続けていきたいと思っている人は少なからずいるはず」と話す。

松本山雅FCの運営を成功させている実績を買われ、すでに毎年夏に開催される自転車レース「ツール・ド・美ヶ原」や「全日本マウンテンサイクリング in 乗鞍」の運営に参加しており、プロバスケットボールbjリーグ「信州ブレイブウォリアーズ」のホームゲームのボランティアにも加わっている。スポーツには見えない大きな力があると考えている田中代表は「松本山雅を中心にスポーツを支え、信州を元気にしたい」と思いを膨らませる。

(信濃毎日新聞 中村 恵一郎)



試合準備に向けたミーティングを行うチームバモスのメンバー



©松本山雅FC グッズ販売を行うメンバー。優しい笑顔がスタジアムの雰囲気を和ませる

©松本山雅FC

「寛容の精神」が日本のために

Jリーグ 競技・事業統括本部長 中西 大介



Jリーグアジアアンバサダーの指導で、6月にタイで実施したサッカークリニック

ノウハウを惜しみなく

Jリーグ理念の一つに「日本サッカーの水準向上及びサッカーの普及促進」があり、日本サッカー協会(JFA)も「JFA 2005年宣言」において、2050年までに日本がFIFAワールドカップを開催し、SAMURAI BLUE(日本代表)がその大会で優勝することを目標の一つに掲げています。

これまでFIFAワールドカップで優勝したのは八つの国・地域です。21世紀の前半に9番目、10番目の優勝国が生まれるとしたら、新たなサッカー文化を創造した国ではないかと考えています。それは新しい地域で、欧州や南米の伝統にとられない新たな要素を加えることができた国、というのが私見です。優勝経験のある伝統国を追い掛けるというより、経済や社会の変化を踏まえ、先取りをする必要がある。そう考えていくと、サッカー人気が高いアジアで、サッカーがビジネスとしても発展し、高いレベルで競争し合い、その結果として世界チャンピオンが生まれるという一つのイメージが浮かび上がります。

アジアの中でJリーグだけが、日本代表だけ



ミャンマーとの協定締結に臨んだ大東チェアマン(左)

が突出しているのは、限界があります。そこで、Jリーグが20年間で蓄積してきたノウハウを無償で提供し、意欲のある国々のリーグとパートナーシップ協定を結び、ともに発展していきたい。それが、ことしからスタートさせた「アジア戦略」の基本ポリシーで、タイ、ベトナム、ミャンマーのプロリーグと協定を締結しました。

アジアサッカー界で、Jリーグはプロサッカー発展の一つのモデルを示すことができるのではないのでしょうか。幸い、この20年間におけるJリーグの発展、FIFAワールドカップやAFCアジアカップでの日本代表の活躍などによって、日本サッカーへの評価は高まっています。Jリーグが、日本サッカーが作り出すスタンダードは素晴らしいと証明する好機でもあり、われわれのノウハウを惜しみなくアジアへ提供していきます。

ビジネス面の発展を考えると、広いマーケットを持つことが必要です。そのベースとなる認知度を高めるために、Jリーグの試合放映も現地で始まりました。その地域でより多くの人々に見て、知ってもらうことが重要だと考えています。広いマーケットができれば、選手や指導者が活躍する場も拡大し、新たな経験、刺激によってさらなるレベルアップにつながる可能性があります。東南アジアのトップクラスの選手も、Jリーグでプレーするようになってほしい。

アジア戦略の元年としては、以上のようにパートナーシップ協定締結と試合放映の実現が二本柱でした。

トライする勇気を

こうした取り組みの成果は早速、上がっているように思います。パートナーシップ協定を締結した3カ国からは、Jクラブに試合をしに来てほしいというオファーが数多く届いています。また、ベトナムで初めて開催されるアウオーズのために、ノウハウを知る人材を派遣してほしいという要請もあり、それに応えました。日本に学びたいという意欲、協定が良く機能していること、そしてわれわれの考え方、精神がきちん

と理解されている感じを受けています。無償の提供については、さまざまな意見がありますが、それが最終的には日本のためになると思います。オープンにシェアして、各国のサッカー発展をサポートする。越えるべきハードルが高くなればなるほど、跳躍力も身に付きます。日本サッカーが世界に伍して戦えるようになるためには、寛容の精神も必要という考えです。

まだ1年にも満たない活動ですが、さまざまなレベルでの貢献が可能と感じています。トップレベルの強化とともに、Jクラブが地域で果たしてきた役割が、そのままアジア各国の地域で役立つような活動も数多くあります。Jクラブがそれぞれのホームタウンで行ってきたことは、そのまま世界をつなぐ活動になる気がします。国境を越えて友情を育むのに、Jクラブは素晴らしいノウハウをつくり上げました。

2年目の活動としては、さらにパートナーシップの提携先を増やしていきたいと考えています。また、現地でのサッカー教室実施、ノウハウをシェアする活動などは地道に続けていきます。

Jリーグ創設当時の先輩たちも、VゴールやPK戦による決着、2ステージ制など、魅力的なリーグにするために、さまざまなチャレンジを行ってきました。そうした努力を経て、現在のJリーグがあります。われわれもJリーグ創設20周年という節目に当たり、トライする勇気を持ちたい。アジア戦略も、その一つです。(談)

アジア戦略の歩み

2月17日	タイプレミアリーグ(Thai Premier League、略称:TPL)とのパートナーシップ協定を締結
3月後半	タイのGMMグラミー社のケーブルテレビ局でJ1リーグ戦の放送が始まる(6月から同社の地上波局で録画放送開始)。
6月9日	タイのバンコクで「Jリーグアジアアンバサダー」(木場昌雄、丸山良明の両氏)任命式。式後、TPLとの共催でフットボールクリニックを開催(2011年の洪水被害にあった地域、特に子どもたちの支援が目的)
8月7日	ベトナムのプロリーグを運営するベトナムプロフェッショナルフットボール(Vietnam Professional Football Joint Stock Company、略称:VPPF)とパートナーシップ協定を締結
8月27日	ミャンマーナショナルリーグ(Myanmar National League、略称:MNL)とのパートナーシップ協定を締結
11月15、17日	ミャンマー代表との招待試合にファジアーノ岡山が参加
11月16~21日	ベトナムで開催の「BTV CUP 2012」にJ2リーグを代表してアビスパ福岡が出場
(参考)	
8月27~30日	セレッソ大阪とヴィッセル神戸のU-15チームがタイへ遠征

